

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】大塚 修

【所属】(助成決定時)東京大学大学院・人文社会系研究科博士課程

【研究題目】前近代ペルシア語文化圏における世界認識の変容
:十一世紀後半から十五世紀における世界史書文献の研究

【研究の目的】

本研究の目的は、前近代を生き延びた歴史家がどのように過去を認識し歴史書を著したのか、そして、その歴史書がどのように後世の歴史家や知識人に継承されていったのかを明らかにすることである。その中でも本研究が扱うのはペルシア語文化圏における歴史書と歴史家である。ペルシア語文化圏では、イスラーム以前のゾロアスター教的歴史叙述、イスラーム化以降に広まった旧約聖書的歴史叙述、モンゴル時代に広まったトルコ・モンゴルの歴史叙述の三者が融合し一つの新しい歴史叙述が創成された(ペルシア語普遍史)。ここで誕生した歴史叙述は、西はトルコから東はインドに至るまでの地域で広く受容され、言語・民族をこえた一つの共通の世界認識を作り出した。しかしペルシア語普遍史は以上のような重要性を有するにもかかわらず、これまで研究の対象とされることはなかった。そこで本研究では、ペルシア語普遍史が成立する十一世紀後半からそれが歴史書の一類型として確立していく十五世紀までのペルシア語普遍史の変容とその需要について考察する。

【研究の内容・方法】

もちろんペルシア語普遍史は歴史史料として様々な研究で用いられてきたが、注目されるのは著者と同時代の部分の記述であり、普遍史全体の構成やそこに叙述された世界認識を分析しようとする研究はほとんど見られなかった。しかし、J.S. Meisami, *Persian Historiography to the End of the Twelfth Century*, Edinburgh, 1999 の刊行以降、歴史書を「史実」を導き出すための道具としてではなく、それ自体を分析の対象とする歴史叙述研究が近年徐々に市民権を得つつある。本研究では Meisami が行った作品のテキスト分析に加え、歴史書の写本・翻訳の数からその作品の後世における受容の問題にまで踏み込む。つまり、本研究が従来の先行研究と大きく異なる点は、徹底的な写本史料の収集と分析にある。そこで、本助成金をもとに2011年3月にはインドで、7月にはロシアで写本調査を行った。インドでは、ヌールマイクロフィルムセンター(デリー)、アリーガル大学(アリーガル)、ラザー図書館(ランプル)、ホダーバフシュ公共図書館(パトナ)、アジア協会(コルカタ)、国立図書館(コルカタ)を訪問、インドにおけるペルシア語史料の受容を調査した。ロシアでは、サンクトペテルブルグの国民図書館、アジア写本研究、サンクトペテルブルグ大学で調査を行った。今回の調査の対象に両国を選んだ理由は、これらの図書館に所蔵されるペルシア語写本の調査は未だ本格的に行われておらず、現物を確認する必要があるからである。今回は、写本の書写年代、書写地、装飾、購入経路などの基礎データの収集に努め、それぞれの歴史書写本がどのように後世の歴史家や知識人に受容されたのか、その写本がいかなる社会的機能を果たしたのかを検討した。また、重要と思われる写本の画像データを購入した。

【結論・考察】

今回の写本調査で特筆すべきは、インドにおけるペルシア語史書の受容過程の一端が明らかになったことである。ムガル朝下のインドで多くのペルシア語歴史写本が作成されたことは有名だが、その多くはイギリス植民地時代に海外に持ち出されてしまい、実態はよくわかっていない。ところが今回調査の調査で、ランプルのラザー図書館には、ティムール朝期に作成されムガル朝に伝来したと考えられる古写本が幾つか残っていることが明らかになった。本研究に関係する写本としては、1439年にヤズドで書写された『勝利の書』装飾写本、15世紀に書写されたと考えられる『集史』挿絵入写本がそれにあたる。これらの写本はムガル朝がその出自であるティムール朝の写本を収集していたことを示す一つの証拠で、ペルシア語文化圏における歴史書の受容を考える上で重要な事例の一つだと考えられる。今後は、海外に持ち出された写本コレクションとインド国内に残る写本コレクションを総合的に分析することで、ペルシア語文化圏の東端に位置するインドにおける歴史書の受容の在り方を明らかにしていきたい。

